

## 日本応用地質学会主催 第9回海外応用地質学調査団に参加して

株復建技術コンサルタント 太田 保

この会は毎年日本応用地質学会が行っているもので今年は連続9回になり、私は第7回のトルコ・ギリシャ、第8回のバンクーバーに引き続いての参加で今年はネパールです。

この大地にはこの時の紀行文を投稿してきました。今回（平成11年9～10月）も貴重な経験をしましたので皆さんこれから旅の参考になればと思い書いて見たいと思います。

この紀行文が縁で皆さんがネパールに興味をもたれ観光で生きている発展途上国に行き外貨をたくさん落としてネパールがより豊かになればとも考えています。

日本応用地質学会ではIAEGで主催するシンポジュームに併せてこの会を企画しています。この会の特徴は世界の学会に参加する事と会独自のツアーを企画している事で今回の目玉は世界の屋根エベレストの見えるところまでのトレッキングでした。標高3,800mのシャンボジェのホテルまで行き間近に世界の屋根を見ることでした。

今回の調査団は少し変則的でこのネパールの前がマレーシアで行われた第2回アジアシンポジュームでこの会にのみ参加した方や引き続きネパールまで足を延ばした方もおり全

体での参加者は27名で最後のトレッキングの参加者は14名といった状況でした。

このアジアシンポジュームは日本の当学会が計画したもので2回目になりますがアジアの一員として今後も力を入れて行く予定で2年後がインドネシア、4年後がイランでの開催が決まりました。日本も応援してアジアでの応用地質学の発展に寄与したいと考えています。このシンポジュームは23日～25日までで26日にネパールのカトマンズで落ち合うことになっていましたがその日には会えず27日の再会となりアジアの現実に直面したわけです。乗り換えの飛行機に間に合わなかったという事でした。



学会に参加した当調査団の面々（ホテル前で）

まずはこの15日間の日程についてお話し、その後その行程毎に大きく区分してお話ししたいと思います。

出発地は直行便のロイヤルネパールの関係で26日の日曜日に関西空港からの出発で上海を経由して7時間のフライトで最も危険と言われたカトマンズ空港に何事もなく到着しました。見た限りではさほど危険な空港とは見えませんでした。人の言うことはあてにならないものです。緊張して損をしました。

この日の夜から9月30日まではネパールの首都カトマンズで過ごし3日間が学会でのシンポジュームでした。このシンポジューム期間の過ごし方は人さまざままでまじめに参加する人、割り当ての時間のみ参加し後は市内をくまなく観察する人に分かれました。私も今まで後者の方が多かったのですが今回はいろいろ興味もあり比較的まじめにシンポジュームに参加し各国の母国語に英語の単語が乗ったようなブローカンな英語の世界を経験していました。これは苦痛ですが少し判ったりすると楽しみになるものです。

10／1日～4日はネパールの学会が企画したポストツアーに参加しサツマイモのような形をしたネパールの国をほぼ長方形にバスでの地質巡査です。ネパールの世界の屋根を形成した地質構造や日本ではお目にかかるないプレカンブリアンの地質を見ながら南のインド国境にあるジャングル地帯の付近を通り、西に行きまたいくつも山を越えネパールの京

都と言われるポカラで2日間を過ごし、又バスに1日揺られカトマンズにたどり着きました。ポカラへの道は遠くいくつ峠を越したのでしょうか夜の10時に到着して皆さんへとへとでした。ネパールの学会の熱意を感じましたが。

日本の道路の整備状況に比べると雲泥の差がありますが40年前の日本はこれ以下であった事を考えるとあまりいえません。

カトマンズについた夜は団長主催のパーティを日本食の店でやり鋭気を養い、ここから帰国する方とエベレストへのトレッキングをする方が別れを告げる場にもなりました。

5日～8日までは今回当学会が企画したエベレストへのトレッキングです。早朝ルクラと言う2,300mの山中の空港に向けてセスナ機で出発です。天候は比較的良かったですが傾斜したルクラの空港に着くと小雨模様の肌寒い陽気に前途が心配されます。

このトレッキングでも地質屋の集団であることを忘れずサンタマンさんという地質学者をみんなで雇い地質巡査をしました。

このトレッキングの道は幅2m程度で生活道路なのですが登山者、シェルパー、ポーター、荷物運搬の牛で渋滞します。特にいくつかある吊橋の上では特にひどい状態です。

ここまで来て渋滞とは驚きです。

1泊2日をかけて3,500m付近にあるナムチエバザールという比較的大きな村に到着しここから一気に300mほど登ってを目指すシャ

ボジェパノラマホテルを目指すわけですが高山病の兆候が出て足が重くてあがらません。遅い昼飯で銳気を養ってホテルには4時頃無事到着しました。

その夜は好きな酒も誰も飲まず高山病に備えたのですがほとんどが軽い高山病を経験したようです。頭が痛く、脈拍が110にもなり眠れずさんざんでしたが2人を除き次の日にナムチエバザールまで降りて地質巡検をして調整をした結果直りました。

この夜からやっと雨期が開け乾期になったようでヒマラヤの白い山塊が見え始めました。

そして、帰るその朝360度のパノラマでヒマラヤ山塊が見え念願のエベレストが見えました。感激、感激です。

最も心配したヘリコプターでの脱出ですが晴天で無風といったこれ以上ない好条件に恵まれポカラでは見られなかったマナスルも見られ1時間足らずでカトマンズに着きました。

それまではヘリコプターの墜落等の危険性を自称ネパール通からいやになるほど聞かされていましたのでほっとしました。自分で行かないなら言わなければ良いものを。世の中には人を脅かして楽しんでいる人も多いものです。

8日と9日はカトマンズで骨休みをして10日の真夜中にカトマンズを後にしました。

8日からは乾期になり暑さと空の色が違います。来たときのどんよりした日本の梅雨の様な季節とさようならで澄み切った青空と心

地よい暑さとなりました。

私はプールで泳ぎましたが標高が高いせいかすぐに疲れてロングスイミングは出来ませんでした。このせいばかりではなくトレッキングの疲れも溜まっていたのでしょう。

10日のお昼頃関西空港に着き、ざるそばと日本酒がうまたったこと。この酒に酔われたのか一人行方不明になりましたが日本での事ですので心配しません。ネパールでは緊張していましたでしょう。

そんなことで無事帰国しました。早いものでもう1ヶ月が過ぎようとしています。

忘れない内に各場所でのエピソードを交えてもう少しお話ししたいと思います。

#### 1) カトマンズの町

この町はネパール王国の首都で全人口2,113万人の内の140万人が住むほぼ平坦な盆地で気候も温暖です。国語はネパール語で面積は日本のほぼ40%、日本との時差は約3時間遅れです。この町の印象は夜の町が全体に



元の飛行場跡に到着した脱出用日本製ヘリコプター

薄暗い事、人が多い事、喧噪である事などでカルチャーショックになった団員も多くいました。私はジャカルタを経験していましたのでほとんどショックを受けませんでした。

インドの影響を強く受けている国でヒンズー教徒が多く、牛が町を闊歩しているのはインドと同じです。サリー姿で彫りの深い美人の女性と子供の数が圧倒的に多いのも特徴で少子化の日本と対照的です。発展途上国のどの国でもそうですが笑顔の美しい子供達を見ていると将来に対して頼もしさを感じました。片言の日本語、英語を話す事は収入にも響く訳ですので観光地では千円、イチドルの声が絶えずします。語学に対する反応は強く、大学生ならほとんどが英語を話します。この国の大學生はエリートです。

私はあまり観光地には行きませんでしたが、着いた翌日仲間と二人で市内を5時間ほど歩きました。市内地図が良くなく迷った事もありましたが、良く歩いたものです。その間は全く危険は感じませんでしたので比較的治安は良いのでしょう。

タクシーは日本でも昔、神風タクシーと言われたのですがとても乱暴な運転で生きた心地がしません。ホテルのタクシーはベンツなどの大型車で比較的安心出来ます。

お金の単位はルピーで1円が0.6ルピーです。この国にとっての1ルピーの価値は高く日本円には約2倍すれば良い訳です。踊りを見て、ビールを飲み、食事をして400ルピー

程度ですので大満足で、モモという蒸し餃子が名物です。ニンニクのきいたスープも最高でした。ネパール料理はいろいろ食べましたが細長い米にマッチした料理でほとんどがおいしく特に鶏肉がうまかった事が印象に残っています。

## 2) I A E Gのシンポジューム

ネパールの学会が主催したのですがいろいろな国から参加しました。特に日本をはじめアジアの参加者が目立ちました。開会式には国王が参加され厳かに行われました。

ただ、慣れないためか受付では参加者が長い列を作っていましたが手続きに手間取り怒り出す人も出ました。日本の学会では見られない光景でした。

キーノートスピーカーが7人、発表論文は応用地質58編、水利地質学95編、自然災害66編の合計219編の応募がありました。日本の方の発表も多くありましたがネパールの方の発表が多く張り切っている事が判ります。英



ネパールの市街地の状況（ホテル近くで）

語は世界共通語ですが聞いていますと自国語に英語の単語を乗せて話しますのでいろいろな英語が楽しめますが意味はよく判かりません。英語圏の方が話されるとはっとしたりします。日本人もどんどん話すべきです。私も懇親会でネパールの学生と話しましたが単語が出尽くして底をつきギブアップてしまいました。せっかく美人さんと話せたのに。今回の紅一点の方にバトンタッチして難を逃れました。もっと語彙を貯めねばと反省し今、頑張っていますが東北なまりの日本語がすぐ顔をだし、日本語が英語に変換出来ません。出来の悪い頭は時間をかけねば言うことを聞きません。

今後もこのような国際学会に積極的に参加して行きたいと考えています。

### 3) ポストツアー

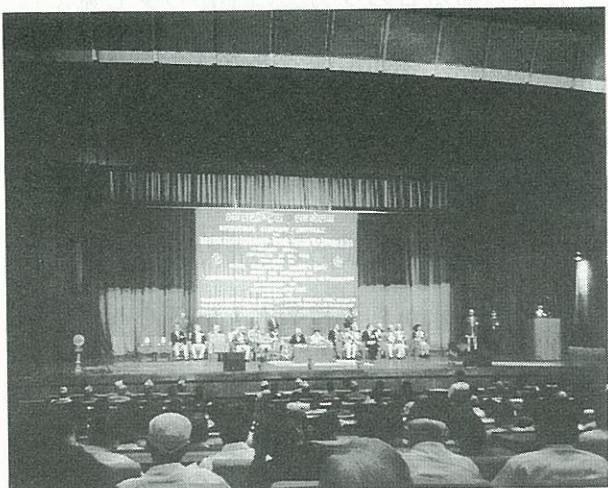
このツアーレは盆地のカトマンズを出発し南のインドとの国境の町バイワラで1泊、西のポカラで2泊して帰る3泊4日の地質巡検です。たかだか、500kmの旅でしたがその長かった事。川沿いの急峻な崖の下を通る道路や何曲がりと行って良いのか標高差500mを登り降りする道や山を幾つ越えたら着くのかと思うような山越えの道で距離だけでは判断出来ません。天然の風が頼りの冷房で雨期が開けないため日本の梅雨の様な天候の中を地質のスポットを見ながらの旅で午後10時着の日もありくたくたに疲れました。地質のポイントではヒマラヤ山塊を押し上げた衝上断層や地

球に最初に酸素を出したストロマトライトを含むドロマイ特などを観察出来ました。

一生、河原の石から碎石をハンマー1つで作るカーストの人達が住むほつ立て小屋の集落や道路の擁壁構造物は全て蛇籠ですませる道路災害復旧現場などがこの国を象徴する景色でした。

この国のメイン道路の入り口には昇降式の棒で出来たバリケードがあり通行するバスなどがお金を支払っていました。この金で道路の復旧をしているようですがユンボなどの重機は見あたりません。すべて人力で蛇籠に石を詰めて復旧しています。日本人が教えた方法だと言われています。また、雨期の期間は1車線のみ確保し本格的な復旧はしないようです。いくら直してもすぐ壊れますから。

インドに通じる道路は軍事的な関係や交流が盛んなため比較的広い道が通っていますが交通量が多くトラックが目立ちます。バスはどんどん追い越し、肝をつぶす時もあります



国王参加で厳粛な雰囲気で行われた学会の開会式

がドライバーは警笛で合図しながら平気で、慣れている様です。しかし、エンジントラブルで燃えているトラックや崖下に転落したトラックもいますので事故も多いのでしょうか。このような車は回収されてリサイクルされていました。事故現場には人が多く集まりますので食べ物の屋台がすぐ出てきます。

このツアーは地質巡検で川沿いの急崖斜面に作られた道路を行きますので落石があればと思うだけで身が縮みます。縦断勾配もきついためバスも故障しますが少しも慌てず運転手が直します。ここでの運転手はスーパーマンでカーストなのかもしれません。

いろいろありましたが2日間滞在したポカラは大変きれいな町で地中に落ちる滝や橋のアバットが地割れの進行で危険になっている所など不思議なものを見ました。これには理由があり地下が鍾乳洞の様になっているようです。

晴ればマナスルなどが見えるのですが残念ながら帰る日の夕方雲の中から少し見えた程度でした。湖面に移る逆さマナスルはプロが撮りました写真を買って見ました。人生に疲れたら湖にあるホテルに滞在してこのすばらしい山々眺めるとまた元気が出るそうです。日本からの観光客もいるそうですが欧米の滞在型が多いようです。

貸し自転車で町の中を見物しましたがパンクした自転車がかなりありました。お金は返してくれません。借りた人の責任のようです。

この国でも商人が一番偉いようです。

#### 4) エベレストのトレッキング

感激して前段でかなり書きましたので簡単に紹介します。

このトレッキングの道はと聞かれれば東京の高尾山に登る道と同じ感じと私は答えます。この道に沿ってこの登山者をターゲットにしたロッジが数多くあり、現金収入が入るため昔と様子が一変したと言われています。私たちのパーティは寝袋とコックをつれての登山ですのでロッジでは部屋の提供だけです。このロッジでは雨漏りのする部屋や雑魚寝状の部屋などがありいろいろでしたが日本の山小屋で寝る思いをすれば極楽です。まだ雨期の様で雨が降り続いています。この先が心配されます。

このトレッキングには欧米人が多数来ておりどんどん先に行きます。そんなに急いでどうするのかと思いますがこれが彼らの性格なのでしょう。高山病を恐れている私達には想像がつきません。

シェルパ族の村ナムチエバザールはやや緩傾斜の沢底に開けた村でいろいろな店がありますが土産物屋とホテル、ロッジが大半です。何処に行くにも坂道です。

この店で買ったクッションカバーが帰国してから好評でもっと買うべきであったとも思いましたがその時は十分買ったつもりです。会話は英語だったような気がしますが詳細は忘れました。

この道中での地質はほとんどがアウゲンナイスと呼ばれる花崗岩の球が入った片麻岩でエベレスト山脈誕生の苦痛の跡だとも言われています。サンタマン博士もゆっくりしたわかりやすい英語で話してくれましたので理解出来ました。

2泊した3,800mのパノラマホテルは自家発電ですが暖房は電気のみなので寒くてしょうがありません。1日目は軽い高山病になつていきましたので酸素のある添乗員の部屋番号No.25の番号が忘れられませんでした。

1日の夜から周囲の白く光ったヒマラヤ山塊が雲の間から見えたのですが私は頭が痛く起きれずよく見られませんでしたので悔しい思いをしました。

その反動で2日目は朝5時から起きて夜明け前の星空から雲1つない360度のパノラマと朝日まで見られました。みんなを起こして廻り全員で大満足しました。

以上で私のネパール紀行は終わりです。



エベレストをバックに立つ筆者



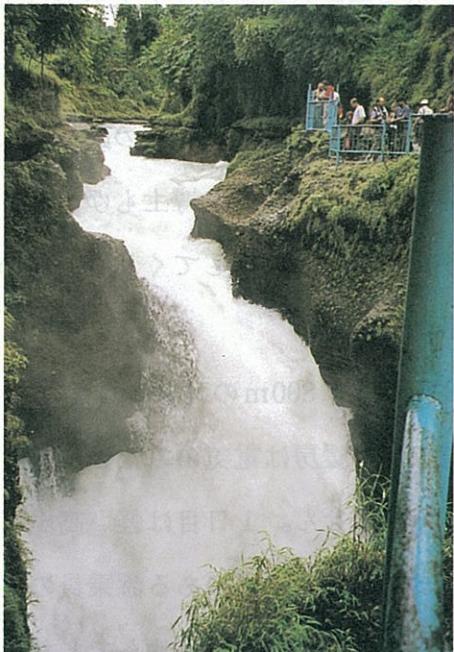
中央のエベレスト、ローチェを中心とするヒマラヤ山塊

山岳アマゾンへ歩く白い開拓と蚕豆の日

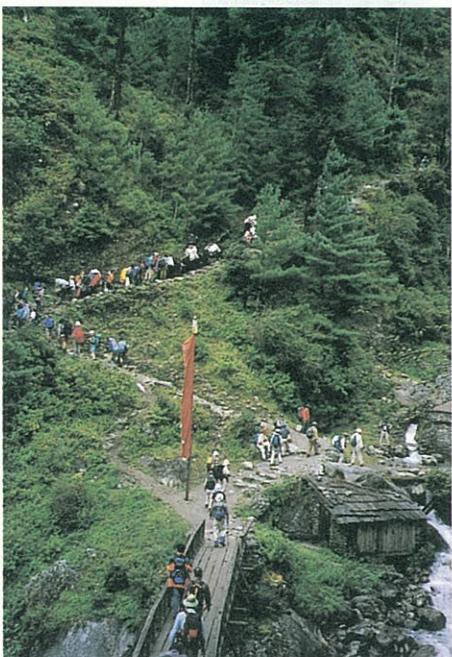
アマゾンが運んでくるのが良さで間の差



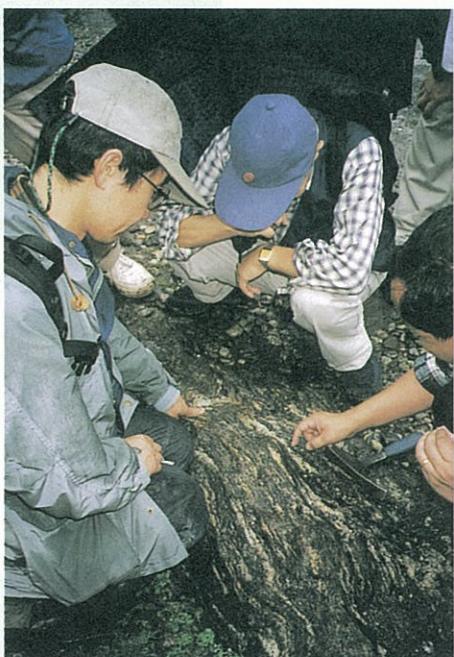
ポストツアーの大地すべりと砂防ダム



ポカラ市内にある地中に落ちる滝



ヒマラヤエベレストへのトレッキングロード



アウゲンナイスを観察中の団員とサンタマン氏